

(公財) 千葉県教育振興財団は、昭和49年(1974)年11月に設立され、平成26年に設立40周年を迎えました。今号は、その歴史の中で注目された遺跡を地域ごとにピックアップして紹介します。

◀丸木舟の取り上げ作業

◀市川市雷下遺跡丸木舟

丸木舟は、全長7.2mあり、幅は最大50cmほど、厚みは舟底部の端で約8cmです。舟全体が土圧によりほぼ平坦になっていますが、舷側部や両端部の立ち上がりが見え確認できます。

部材の一部で放射性炭素年代測定を行い、約7,500年前という結果となり、現在日本最古の丸木舟であることが分かりました。また、材質はムクノキと同定されました。

contents

速報 市川市雷下遺跡 (表紙)

40年をふりかえって

- ◆ 市川市北下遺跡 (最新)
- ◆ 四街道市池花南遺跡
- ◆ 市原市ちはら台遺跡群
- ◆ 山武市小川崎台遺跡
- ◆ 館山市長須賀条里制遺跡
- ◆ 木更津市笹子城跡

市川市北下遺跡

最新

北下遺跡は、下総国府推定域の東端に位置し、国史跡に追加指定された下総国分寺創建瓦を焼成した瓦窯跡のほか梵鐘の鑄造遺構など注目される成果があがっています。また、旧河道からは多量の墨書土器や人形などの木製祭祀具を用いた古代の祭祀跡も見つかっています。今号では、平成26年7月～12月に調査された最新の成果を紹介します。



▲新たに見つかった鑄造遺構の台座部分

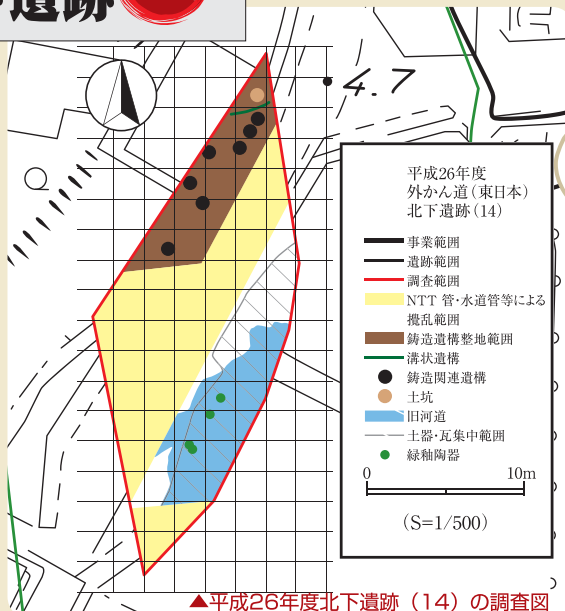


▲馬の下顎骨（下）と瓦（上）

今回の調査では、新たに複数の鑄造関連遺構が見つかりました。それらは梵鐘の鑄造遺構より一段低い平坦面に位置しています。直径80cmの円形台座の上に炉壁を置いた鑄造施設もあります。

国分川の旧河道では、多量の瓦とともに土器や人形などの木製祭祀具や馬の下顎骨が出土しており、古代の祭祀跡と一連のものと思われます。

馬の歯は平成23年度までの調査で複数例確認されています。



▲平成26年度北下遺跡（14）の調査図



「東院」と書かれた墨書土器で、下総国分僧寺の中心的な施設を意味していると思われる。

四街道市池花南遺跡

池花南遺跡は、印旛沼に注ぐ手線川最上流の台地上に位置しています。昭和59年度から61年度にかけて発掘調査が行われ、特に約3万年前の第1文化層（Ⅸc層）から発見された環状ブロックは全国的にも注目され、出土した石器740点が平成7年に県指定有形文化財（考古資料）に指定されました。

環状ブロックは、その後の池花南遺跡に隣接する物井地区の小屋ノ内遺跡や御山遺跡、出口・鐘塚遺跡でも見つかっており、旧石器時代はじめ頃の特徴的な遺跡が集中する地域として知られています。



台形様石器の母岩となった珪質頁岩などの分割・消費や供給などを検討した結果、5つの単位集団の集住が想定されています。

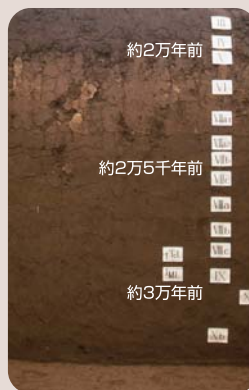
この文化層から出土した石器のうち、主体となる器種は28点の台形様石器で、主に珪質頁岩が使われています。

旧石器時代初め頃の特徴的な石器で、台形となるものが多いことから命名されています。柄を付けて刺突具または切削器に使用したと推定されていますが、いまだナゾの多い石器です。



▲第1文化層環状ブロック群

東西30.5m、南北28.5mの規模で、中央の石器群ブロックを囲むように17か所のブロックが環状に分布しています。



◀池花南遺跡
立川ローム層柱状図

関東ローム層は、主に古富士噴火による火山灰によって形成され、下から下末吉ローム層・武蔵野ローム層・立川ローム層に大別されます。房総の旧石器時代の石器は、Ⅹ層からⅢ層の立川ローム層中から発見されています。

池花南遺跡

雷下遺跡

BC (紀元前)

旧石器時代

縄文時代

弥生

約30,000年前

約12,000年前

約2,000年前

市原市ちはら台遺跡群

ちはら台遺跡群は、
大規模な集落が調査

された草刈遺跡のほか10遺跡で構成された約87ヘクタール（東京ドーム18個分ほど）に及ぶ広大な面積を有しています。調査の結果、房総最古（3万5千年前頃）の石器を含む旧石器時代から中・近世にいたる多くの遺構や遺物が発見されました。特に、弥生時代から古墳時代を中心とした竪穴住居跡は総数4千軒、

古墳は170基ほどにも及んでいます。まさに千葉県最大の遺跡と言えましょう。



1号鐃 ▲川焼台遺跡 2号鐃



▲草刈遺跡H区

小銅鐃は北九州から関東にかけて50例ほどあり、そのうち9例が千葉県出土で、全国的にも小銅鐃の集中地域となっています。

ちはら台遺跡群では4例出土し、草刈遺跡H区小銅鐃は古墳時代前期の方墳の埋葬施設から発見されています。他の3例はいずれも竪穴住居跡からの出土で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて使用されたものと思われます。



▲草刈遺跡F区全景（部分）



有名な『魏志倭人伝』に、「特別なことをする時は骨を焼き、割れ目をみて吉凶を占う」とあるように、卑弥呼は占いの際にト骨を用いていたと考えられています。

草刈遺跡のト骨には、二ホンジカの肩甲骨と寛骨に棒状の道具の先端を焼いて骨に押し当てていた痕跡をはっきり見ることができます。竪穴住居内に廃棄された貝層中から発見され、この貝層からはウミガメの甲や刺突具状骨角器など占いに関係すると思われる遺物も伴っています。



▲草刈遺跡K区のト骨



山武市小川崎台遺跡

千葉東金道路二期工事に先行して

平成5・6年度に調査されました。

発掘された古墳群は小川崎台古墳群として知られており、2基の前方後円墳と5基の円墳で構成されています。発掘された最大の古墳は、全長24.5mの帆立貝型前方後円墳で、墳丘中段に並べられた山武地域の特徴をもつ埴輪列が注目されました。

3号墳の築造年代は、出土した埴輪と土器から6世紀中頃と考えられています。



▲人物埴輪



▲馬形・鳥形埴輪



家形埴輪▶

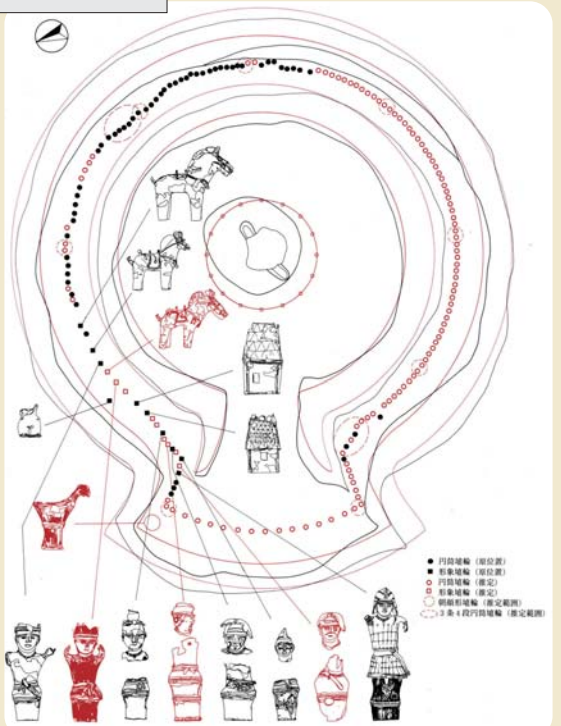


▲調査区全景

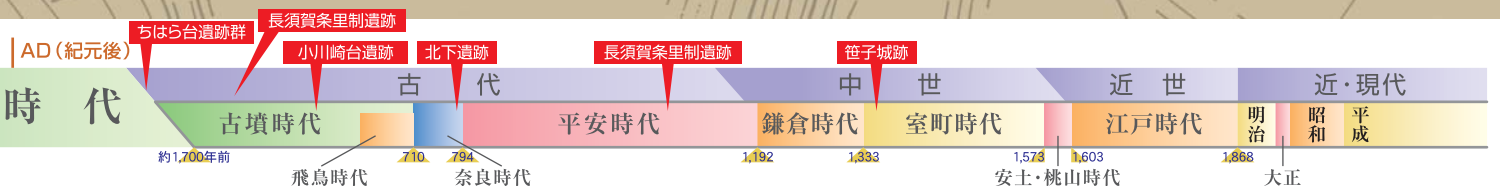
形象埴輪はくびれ部北側に集中して見つっています。

内訳は、人物埴輪14体、鳥形埴輪7体、馬形埴輪3体、家形埴輪2体です。人物埴輪には、挂甲を着た武人埴輪や頭に壺を載せた女子、琴を弾く男子坐像などがあります。

▼3号墳埴輪位置復元図



墳丘中段のテラス部分を巡るように多くの埴輪が樹立されていました。円筒埴輪は総数170本程度と想定されます。



館山市長須賀条里制遺跡

発掘調査は、国道410号バイパス建設に先行して、平成5年～10年にかけて断続的に行われました。

総延長1kmに及ぶ調査で、従来から知られていた古代の条里制に伴う畦畔のほかに、弥生時代の堰を伴う水路や古墳時代の水田・水路など生産を目的とした遺構が長期にわたって存在したことを示しています。また、古墳時代の水路には、水際の祭祀が伴っています。



▲弥生時代の旧河道の堰

旧河道に直交するように列状に杭を打ち込んで横木を渡した状態で発見されました。多くの弥生時代中期の土器や鉄などの木製農具のほか、火起こし用の火鋸臼も出土しました。



◀古墳時代の小区画水田



◀平安時代の条里型水田（白線部分が畦畔）

古墳時代の水田は、弥生時代を継承するような小区画（1面が1.0m×2.0mと2.5m×4.0mの2種類）の水田が広がっていました。

一方、平安時代の水田は、班田制に伴って整備された条里制が基本となっています。本遺跡から見つかった畦畔は、20m間隔であることから、半切型の地割りの1段歩の大きさと考えられます。



▲古墳時代の水路と木樋

古墳時代の水路に付属した木樋が調査されました。西側の水田に水を引き込むための導水施設で、木樋本体は一木を断面逆台形状に削り抜いたもので、扉板などの部材を再利用して補強されていました。



弥生時代から古墳時代にかけて使用された旧河道から出土した遺物です。土器は古墳時代中頃（5世紀）で、須恵器は大阪府陶器窯の製品が持ち込まれたようです。



左の土器に伴って出土した滑石製の子持ち勾玉です。水際の祭祀に使われたのでしょうか。



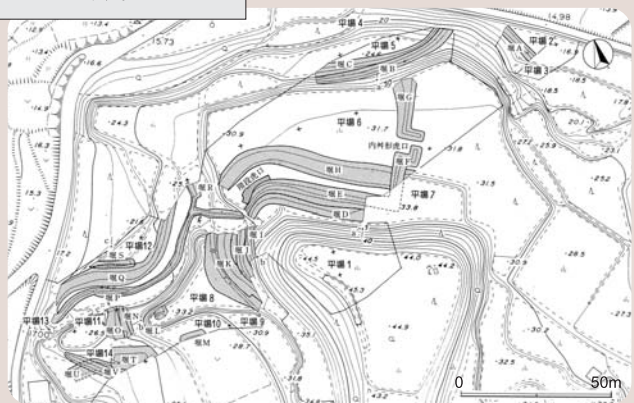
古墳時代の水路から出土した銅鏡で、珠文鏡と思われる。上に穿孔があり、祭祀の際に使われたようです。

木更津市笹子城跡

笹子城に関する直接的な文献はなく、詳細な部分は不明

ですが、江戸時代に編纂された『笹子落草子』によれば、城主は真里谷武田氏一族の武田信茂であったが、1543（天文12）年前後の一族の内紛をきっかけに、外部の北条氏や里見氏が加わって笹子城を舞台に合戦が行われ、落城したとされています。

調査によって出土した大量の陶磁器類からは、笹子城の存続年代は15世紀中頃から16世紀前半を主体とし、16世紀中頃に廃城となったことが想定されます。調査の成果と文献に記載された顛末がほぼ一致した例としても重要な調査となりました。



▲発掘された笹子城跡の平場や空堀



▲笹子城跡航空写真



▲調査区

城域は南北850m、東西400mと県内でも有数の規模を誇っています。全体は7か所の郭で構成されていますが、発掘調査は最北部の郭の先端部、城域全体の1/30程度にとどまっています。

調査では22条の堀と15か所の平場が確認され、平場には多数の建物跡がありました。調査された堀はすべて埋め戻されていましたが、多量の五輪塔は最終時期の堀のみの出土であり、廃城にあたって城域内にあった墓地までも破壊された可能性があります。

▼水晶製五輪塔



高さ3.2cmの小型の水晶製五輪塔です。火輪部と水輪部の内側が削り抜かれており、舍利容器として使われたものと思われます。蓋となる空・風輪部はありませんでした。

▼独鈷杵



密教の法具として使われた銅製の独鈷杵です。長さ15.2cmを測ります。



◀和銅開珎

708（和銅元）年に日本で鑄造された最初の流通貨幣で、皇朝十二銭の一番目にあたります。

中世の北宋銭とともに見つかっており、城内で保有されていたものと思われる。北宋銭と皇朝十二銭が一緒になって発見されることは比較的よく見られます。